

為替週間展望 = ドル円は米消費者物価指数が上振れなら 114円回復も

[12月6日からの1週間の展望]

週間高低 (カッコ内は日)		11月29日～12月3日			
	始値	高値	安値	終値	前週比
ドル・円	113.15	113.96(29)	112.53(30)	113.35	-0.03
ユーロ・ドル	1.1318	1.1383(30)	1.1236(30)	1.1283	-0.0034

=====

国内株・金利 / 米国株・金利		終値		前週末比	
	終値	前週末比	終値	前週末比	
日経平均株価	28,029.57	-722.05	日本10年債利回り	0.051	-0.023
ダウ平均株価	34,639.79	-259.55	米10年債利回り	1.444	-0.029

=====

<来週の主要経済統計等>

- 6日 独10月製造業受注指数
- 7日 日本10月勤労者世帯家計調査
豪第3四半期住宅価格指数
中国11月貿易収支
豪中銀 (RBA) 政策金利
日本10月景気動向指数速報値
スイス11月雇用統計
独10月鉱工業生産指数
独12月ZEW景況感指数
ユーロ圏第3四半期域内総生産 (GDP) 確報値
米10月貿易収支、米第3四半期非農業部門労働生産性指数
カナダ10月貿易収支
カナダ11月Ivey購買部協会指数
- 8日 日本10月経常収支
日本第3四半期国内総生産 (GDP) 2次速報
カナダ銀行 (BOC) 政策金利
- 9日 中国11月消費者物価指数、中国11月生産者物価指数
独10月貿易収支、独10月経常収支
米新規失業保険申請件数
米大統領主催の民主主義サミット (10日まで)
- 10日 独11月消費者物価指数
英10月鉱工業生産指数、英10月製造業生産指数、英10月貿易収支
米11月消費者物価指数
米12月シガン大学消費者信頼感指数速報値
米11月財政収支

【前回のレビュー】米国での資産購入の縮小ペースの加速や早期の利上げ観測が高まりを見せる中、ドル円は調整一巡後に再び上昇基調に転じるとみられる。ただ、115円台から一気に大幅な上昇は見込みにくく、もみ合いながら緩やかに上値を追う展開となるとした。

【パウエルFRB議長がインフレへの見方を軌道修正】

11月26日に新型コロナウイルスの新たな変異株であるオミクロン株が見つかったことで、世界経済の先行きに不透明感が広がり、米国株式市場ではNYダウが905ドル安となるなど急落した。為替市場ではリスク回避の円買いの動きとなり、ドル円は1

15.37 近辺から一時 113.05 付近まで急落した。

米国株はその後も下げが続いて、NYダウは12月1日に3万4000ドル近辺まで値を崩した。ただ、翌日には下げ一服となった。ドル円は11月30日に一時 112.50 台まで下落して、その後は 112 ~ 113 円台での振幅となっている。

11月30日の米連邦準備制度理事会（FRB）のパウエル議長の議会証言では、最近の新型コロナウイルスの感染者数の増加やオミクロン株の出現は雇用や景気に下振れリスクをもたらす、インフレの不確実性を高めるとの認識を示した。

また、「物価上昇が“一過性”としてきた表現を外すよいタイミングがきた」と発言して、インフレへの見方をこれまでから軌道修正した。また、「量的緩和の縮小（テーパリング）を想定よりも数か月早く終了させることが望ましい」「次回の米連邦公開市場委員会（FOMC）で資産購入ペースの縮小加速について協議する」との見解を示している。パウエル議長の証言を受けて、市場では金融政策の正常化が加速するとの見方が広がっている。

一方、オミクロン株への警戒感が各国の金融市場に悪影響を及ぼしている。リスク回避の動きから、米10年債利回りは低下傾向にあり、11月27日の1.66%前後から、12月1日には1.40%近辺まで低下した。その後、金利低下は一服したものの、1.42~1.44%前後の低水準で推移している。米長期金利の低下や米株安を背景にドルは売られやすくなっている。

米国でのテーパリングの早期終了観測や金融政策正常化見通しとオミクロン株への警戒感が交錯する中、オミクロン株への警戒感が後退すればドル円は上昇、逆に警戒感が高まれば一段安となる可能性が高まる。ただ、オミクロン株に関してはまだ情報も少なく、状況が明確になるのにまだ時間がかかるとみられる。

#

12月6日の週で特に注目される経済指標は10日の米11月消費者物価指数となる。事前予想では前年比+6.7%（前回+6.2%）、食品とエネルギーを除くコアは前年比+4.9%（前回+4.6%）となっている。11月の米消費者物価指数の+6.2%は約3年ぶりの高い伸びとなったが、今回はそれを超える予想となっている。予想通りの高水準なら、テーパリングの早期終了に加えて、利上げ前倒し観測につながり、ドル買いにつながる要因となる。

そうした中、オミクロン株に関するニュース報道、米経済指標や米国株や米長期金利の動向などを眺めながらドル円は 112 ~ 113 円台を中心に一進一退の動きが続くとみられる。10日米消費者物価指数が上振れするようなら、114円台を回復する可能性も出て来そうだ。ドル円の目先の予想レンジは、112.00 ~ 114.50 円。

今後の日米の経済指標やイベントとしては、7日に日本10月勤労者世帯家計調査、日本10月景気動向指数速報値、米10月貿易収支、米第3四半期非農業部門労働生産性指数、8日に日本10月経常収支、日本第3四半期国内総生産（GDP）2次速報、9日に米新規失業保険申請件数、10日に米11月消費者物価指数、米12月ミシガン大学消費者信頼感指数速報値、米11月財政収支などがある。

【ユーロドルは 1.13 ドルを挟んでもみ合いか】

11月30日に欧州中央銀行（ECB）のデギンドス副総裁は来年3月にパンデミック緊急購入プログラム（PEPP）が終了した後も、2022年末までECBによる資産買い入れを継続する公算が大きいと述べている。PEPPが終了した後も金融は緩慢的であり続けるべきで、FRBのような量的緩和の縮小（テーパリング）は進めることはないとの認識を示した。

ユーロドルは11月24日に 1.1180 台まで下落した後は、オミクロン株の感染への警戒感によるドル安を受けて、戻り歩調で推移している。11月30日には 1.1383 付近まで上昇したものの、その後は 1.13 近辺でもみ合いが続いている。

ドイツをはじめとして、ユーロ圏では新型コロナウイルスの感染者数は依然として増加傾向にある。こうした中、ユーロを積極的に買い進める動きとなりにくくなっている。ドル安の動きはユーロドルにはプラスとなるが、ユーロそのものの買いは加速しにくく、ユーロドルは1.13ドルを挟んでもみ合いが続くとみられる。ユーロドルの目先の予想レンジは1.1200～1.1400ドル。

日米以外の今後の経済指標やイベントは、6日に独10月製造業受注指数、7日に豪第3四半期住宅価格指数、中国11月貿易収支、豪中銀（RBA）政策金利、スイス11月雇用統計、独10月鉱工業生産指数、独12月ZEW景況感指数、ユーロ圏第3四半期域内総生産（GDP）確報値、カナダ10月貿易収支、カナダ11月Ivey購買部協会指数、8日にカナダ銀行（BOC）政策金利、9日に中国11月消費者物価指数、中国11月生産者物価指数、独10月貿易収支、独10月経常収支、10日に独11月消費者物価指数、英10月鉱工業生産指数、英10月製造業生産指数、英10月貿易収支などがある。

MINKABU PRESS 佐藤昌彦

※投資や売買についての判断は自己責任でお願いします。

<免責事項>

本レポートは情報の提供のみを目的としています。投資に関する最終判断はご自身の責任においておこなわれるようお願いいたします。また本レポートに掲載している情報の正確性については万全を期しておりますが、人為的、機械的その他何らかの理由により誤りがある可能性があり、株式会社ミンカブ・ジ・インフォノイドは、利用者がこれらの情報を用いて行う判断の一切について責任を負うものではありません。また、株式会社ミンカブ・ジ・インフォノイドが提供するすべての情報について、許可なく転用・転載等することを固く禁じます。

<著作権について>

本レポートの著作権は、原則として当社(株式会社ミンカブ・ジ・インフォノイド)が保有しており、著作権法、その他の法律および条約により保護されています。本レポートご利用のお客様は、私的使用目的の複製、引用等著作権法上認められている範囲を除き、当社およびその他著作権者の許諾なく、これらの著作物を翻案、公衆送信、営利を目的とする使用等いかなる目的、態様においても利用することはできません。